「自己を語る当事者の物語が多元性を支えるという観点−自己エスノグラフィー」

山田　瑞紀

当事者が、自分の話をすることがなぜ多元性を支えると言えるのだろうか。通常であれば、個人的な話をするという行為は主観的であると取られ、多元性とは程遠いどころか真逆の位置にあると取られるかもしれない。だが、人が日常的にしている理解を物語論的観点から眺めれば、理解とは、聞き手が話し手の話と聞き手自身の体験とを結びつけて共感できる/想像できる地点に生じるものではなかろうか。理解にこのような前提があるとしたら、個人の話の持つ主観性とは単に話し手の個別的、非合理的なものではない。聞き手が話し手の話を理解できるように感じうるという点において、少なくとも個人の話およびそれに伴う理解とは複数性を持つものではなかろうか。このような話し手以外の他者がその話を理解しうる、そして更にそこから、今度は聞き手が自分の体験を話し始める契機になりうる、そのような話を通じた理解が波及しうるという点が個人の話が多元性を持つという内実である。